

GENSEI-SEIBUTSU

原生生物

第 1 卷 第 1 号 (2018)

目次

特別寄稿

追悼 月井 雄二 博士を偲んで

春本 晃江 (奈良女子大学) 1

第51回 日本原生生物学会大会 (松江) のご案内 (第1報)

児玉 有紀 (島根大学) 3

第50回 日本原生生物学会大会・第1回 日本共生生物学会合同大会 (つくば) のご報告

沼田 治 (筑波大学) 5

学会賞 受賞者コメント

児玉 有紀 (島根大学) 7

奨励賞 受賞者コメント

矢吹 彬憲 (海洋研究開発機構) 8

活性化委員会からのお知らせ

園部 誠司 (兵庫県立大学) 9

日本分類学会連合総会報告

島野 智之 (法政大学) 10

学会等開催情報 11

若手の会 通信

会長挨拶

柴田 あいか (立命館大学) 12

「原生生物学会若手の会合宿 2017 in 淡路島」のご報告

樋口 里樹 (神戸大学) 12

「原生生物フェスティバル 2017 in 筑波」のご報告

内之宮 光紀 (理化学研究所) 13

本会記事 14

会則など 17

事務局からのお知らせ

庶務 細谷 浩史 (神奈川大学)・庶務補佐 北出 理 (茨城大学) 21

編集委員会からのお知らせ 「新雑誌『原生生物』について」

廣野 雅文 (法政大学) 21

追悼 月井 雄二 博士を偲んで

春本 晃江 (奈良女子大学)

日本原生生物学会の評議員で庶務を務められたこともある法政大学教授の月井 雄二 博士は、平成 30 年 2 月 11 日頃自宅で倒れ帰らぬ人となられた。

月井 博士は、1952 年 12 月 27 日に栃木県黒磯市（現那須塩原市）にお生まれになり、1980 年 3 月に東北大学大学院理学研究科生物学専攻博士課程を修了され、理学博士（東北大学）の学位を取得された。同年 4 月より 2 年間、日本学術振興会奨励研究員を務められた後、1983 年 4 月より、法政大学第一教養部の専任講師となられ、1985 年 4 月から同大学助教授、1993 年 4 月より同大学教授を務められた。

月井 博士の業績は、大きく 3 つに分けられる。

① 大学院時代から手掛けておられたゾウリムシ (*Paramecium caudatum*) の接合型の遺伝に関する研究、② ミトコンドリア DNA や大核 DNA をもとしたゾウリムシの多様性解析、③ 原生生物におけるデータベースの構築と著書やインターネットを通じた原生生物に関する情報提供である。これらの業績は高く評価され、2014 年には日本原生生物学会賞を受賞されている。

少年時代から生物をこよなく愛し、昆虫類の飼育・観察を続けてこられた月井 博士は、大学院時代には、ゾウリムシを用いた遺伝学的な研究に従事された。分子生物学の手法がまだ日常的に使われていなかった時代である。月井 博士は、毎日何百本の試験管に培養液を足し、植え継ぎ、形質を調べ、子孫を取り増やす、これを何年も続けておられた。月井 博士は、ゾウリムシの生殖的に隔離されているグループ (syngen) 間においても、人為的に接合させれば妊性のある雑種子孫が取れることを見つけ、膨大な数のかけ合わせによる遺伝解析の結果、接合型 O を表すためには同じ syngen 特異性をもった MA 遺伝子と MB 遺伝子が必要であること、接合型 E を表すためには Mt 遺伝子が必要で、この Mt 遺伝子は MA 遺伝子と MB 遺伝子のはたらきを抑制することを明らかにされた。異なる syngen 間でも子孫が取れるということは、syngen が生殖的に隔離されている集団であるという考え方と矛盾する。そこで次に、月井 博士はゾウリムシのさまざまな系統を用いて、syngen 間、syngen 内での系統関係をミトコンドリア DNA、および大核 DNA を用いて分子生物学的手法で解析した。すると、いずれの DNA による系統関係も syngen のグループ分けとは一致しなかった。すなわち接合型をもとしたグループ分け (syngen) は、ゾウリ

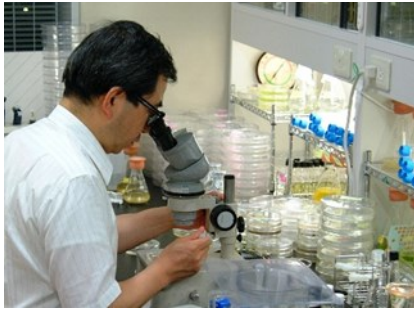
ムシの進化的系統関係とは異なり、syngen はいわゆる「種」とは合致しないことを意味する。syngen 間で子孫が取れる場合もあることを考え合わせると、異なる syngen も含めて「種」と考えるのが妥当かもしれない。ただし一部の syngen 間雑種では染色体不分離が起こるので、生殖的隔離が起こっていると考えられる例も月井 博士は明らかにされている。月井 博士は、ゾウリムシでは「種」分化が極めて初期段階にあり、多くの系統が同一種に分類されるが、接合型が収斂進化を起こした結果、現在見られるような syngen のグループが形成されているという考え方を提唱しておられる。月井 博士の研究は、ゾウリムシにおける「種」の概念に新たな知見を提供したと言える。

月井 博士は生物の培養に関して、天性のたぐいまれる能力とよく動く手をもちあわせておられた。これらの研究の過程で、月井 博士は原生生物の培養技術の改良や優れた系統の保存にも尽力された。ゾウリムシを接合させた場合、子孫の生存率はそれほど高くないのが普通である。しかし月井 博士が改良した 27aG3 という系統は、人為的に自家生殖を繰り返して改良され、子孫の生存率は 100% という高値を誇っていた。大学院時代の研究室の皆は、子孫がよく取れてよく増える株が必要になると気軽に月井 博士に頼んでいた。月井 博士は、そんな時、喜んで何年もかけて改良した株を惜しげもなく提供して下さった。この株を用いて当時の樋渡研究室の多くの仕事が成し遂げられたといっても過言ではあるまい。月井 博士は、研究者同士の競争や打算やかけひきなどということには無縁で、常に誠実で、献身的に科学の発展に貢献することを当然と思っておられたように思う。それはのちに「原生生物情報サーバ」や「淡水微生物図鑑（原生生物ビジュアルガイドブック）」につながっていく。月井 博士の飾らないお人柄は後輩の研究者からも慕われていた。原生生物を愛し、生物学の研究を心から楽しんでおられた。

「[原生生物情報サーバ/Protist Information Server](#)」は、1995 年より月井 博士が中心となって開発されたインターネット上で公開されているデータベースである。こ



ありし日の月井 雄二 博士
(ご家族提供)



実験中の月井 雄二 博士
(法政大学 木原 章 博士提供)

れまでに公開された原生生物等の画像は 8 万枚を超え、3000 以上の種、15000 以上のサンプルを網羅している。このデータベースの特長は、サンプルごとに画像やデータを集めた研究素材データベース

であることであり、画像の他にも月井 博士が手掛けられた原生生物の培養法や実験方法が詳しく書かれており、研究者だけでなく一般の方にとっても貴重な情報源となってきた。「原生生物情報サーバ」は世界的にも評価され、2002 年の *Science* 298, 5601: 2097 には紹介記事が掲載されている。月井 博士は、毎週末のように各地で原生生物の採集をされ、訪れた採集地は 700 か所にも上る。愛用の折りたたみ式自転車に乗り、人

がほとんど訪れることのない高層湿原にも何度も出かけられていた。「淡水微生物図鑑」(2010 年)には、その集大成として、生きた原生生物の写真を中心に 375 属 807 種が掲載されている。

月井 博士は本学会の評議員としても活躍され、これまで 4 期 (2000/11–2003/11, 2003/11–2006/11, 2009/11–2012/11, 2015/11–現在) にわたって務められた。中でも 2 期目には高橋 三保子 会長の下、庶務担当となられ、4 期目には学会賞等選考委員長を務められた。

月井 博士のおられなくなった今、何者にも代え難い方を失った悲しみに打ちひしがれる。月井 博士の代わりはいない。そのことを、多くの人が思っているのではないだろうか。

月井 博士の残された業績は、今後も世界中の研究者と原生生物に興味をもつ一般の方々の道しるべとなっていくであろう。月井 雄二 博士のご冥福を心より祈りたい。

第51回 日本原生生物学会大会（松江）のご案内（第1報）

大会長 児玉 有紀（島根大学）

第51回 日本原生生物学会大会は、下記の日程で島根大学・松江キャンパスにおいて開催されます。

10月は旧暦では神無月と呼ばれますが、出雲大社に全国の神々が集まるということで、出雲地方では神在月と呼ばれています。その神在月に是非島根県にお集まりいただきたく、10月の開催とさせていただきました。本大会では活性化委員会および若手の会との関連のシンポジウムを予定しており、会員の方のみならず中高の先生方や中高生を対象とした、理科教育の現場への原生生物学の普及に繋がるような内容にしたいと考えております。懇親会は、国宝松江城内の興雲閣で行う予定です。島根県の郷土芸能もご覧いただく予定です。当日は松江城周辺がライトアップされる松江水燈路が開催中です。幻想的な雰囲気の中で皆様と原生生物について語り合えますことを楽しみにしております。是非皆様のご参加をお待ちしております。



懇親会会場の興雲閣

1. 会期

平成30年10月19日（金）、20日（土）、21日（日）

10月19日（金）：評議員会、編集委員会、若手の会、若手の会・評議員会合同懇親会

10月20日（土）：大会第1日、総会、懇親会

10月21日（日）：大会第2日、シンポジウム

※ 上記予定については今後追加・変更する場合があります。その場合は現在作成中の学会大会ホームページ（<https://sites.google.com/site/protistology2018matsue/>）にて随時皆様にお知らせいたします。

2. 会場

島根大学・松江キャンパス（http://www.shimane-u.ac.jp/campus_maps/map_matsue.html）

評議員会：生物資源科学部1号館11階セミナー室

編集委員会：生物資源科学部1号館11階セミナー室

若手の会：生物資源科学部1号館2階会議室（203）

総会・発表会場：大学ホール（<https://www.shimane-u.ac.jp/docs/2010102501882/files/hall.pdf>）

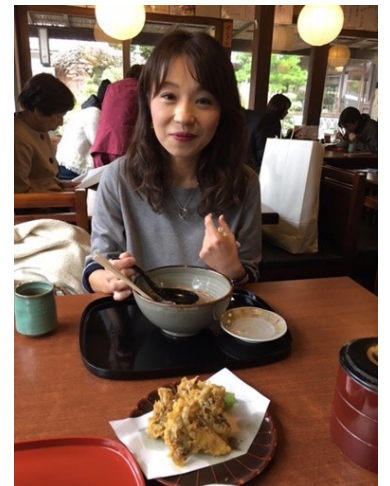
ポスター会場：教養講義室棟2号館1階

若手の会・評議員会合同懇親会：第2食堂2階

懇親会：興雲閣（<http://www.matsue-tourism.or.jp/kouunkaku/>）

※ 会場につきましても今後変更する場合があります。その場合も現在作成中の学会大会ホームページにて随時皆様にお知らせいたします。

- 3. 発表形式** 液晶プロジェクターを用いた口頭発表, およびポスター発表.
※ 発表演題数により, 発表方法の変更をお願いする場合があります.
- 4. 参加申し込み** 要旨提出締め切りおよび事前参加申し込み締め切りは, **2018 年 8 月 19 日 (日)** (予定) です.
申し込みの詳細等は次号の「原生生物」および大会ホームページでお知らせいたします.
- 5. 大会参加費等** 大会参加費等は, 参加登録手続き後にお振り込みください. 当日参加も受け付けますが, 準備の都合上, できる限り事前の申し込みをお願いいたします.
- 大会参加費 : 一般会員 3,000 円 学生会員 1,000 円
事前登録以後 : 一般会員 4,000 円 学生会員 1,000 円
懇親会費 (予定) : 一般会員 5,000 円 学生会員 3,000 円
- 6. 昼食** 学食以外に, 大学周辺にラーメン屋, カレー屋, 定食の店等がございます.
(21 日は日曜のため食堂はお休みとなります.)
- 7. 宿泊** 松江駅周辺に各種ホテルがありますので, 各自でご予約ください.
宿泊情報はこちら <http://www.kankou-shimane.com/ja/spot/lodgings> でご覧いただけます.
- 8. アクセス** 下記 URL をご覧ください.
https://www.shimane-u.ac.jp/nyushi/transport_access/campus_map/campus_map01.html
松江駅から松江市営バスおよび一畑バスにご乗車いただき, 島根大学前のバス停でお降りいただくと便利です. 松江駅からタクシーで所要時間約 10 分, 1500 円程度です. 大学周辺に駐車場はほとんどありませんので, 公共の交通機関でお越しください.
- 9. 大会事務局** 〒 690-8504 松江市西川津町 1060
島根大学 生物資源科学部 生命科学科
第 51 回日本原生生物学会 大会事務局 児玉 有紀
TEL/FAX : 0852-32-6438
E-mail : kodama@life.shimane-u.ac.jp



松江の蕎麦をご賞味ください

第50回日本原生生物学会大会・第1回日本共生生物学会合同大会（つくば）のご報告 大会長 沼田 治（筑波大学）

第50回日本原生生物学会大会は第1回日本共生生物学会の合同大会として、2017年11月17日（金）から19日（日）までの3日間の日程で、筑波大学・筑波キャンパスにおいて開催されました。

私は日本原生生物学会会長に選ばれたとき、学会の発足趣意書の趣旨「広く原生生物の有する特殊性と一般性を明らかにすることを目的とし、原生生物に関心を持ち、あるいはこれを素材として扱われる方々の共同討議の場として本学会を設立する」に沿って4つの目標を掲げました。その第一番目が「原生生物に関心を持ち研究する人々の研究発表と情報交換の場である年大会の充実」です。ちなみに、第二番目は学会誌の充実、第三番目は若手研究者の支援、第四番目は国際交流の推進です。さらに、「4つの目標達成の target year」として、学会創立50周年の2017年を考えています。」と高らかに謳いました（日本原生生物学会 HP の学会長挨拶）。

日本原生生物学会50回記念大会の大会長を引き受けた私は、創立50周年を迎えるにあたり、何か新しい試みを行いたいと懸命に知恵を絞りました。筑波大学のプロティストフォーラムのメンバーと相談したところ、藻類を研究している石田 健一郎 教授が中心になって、日本共生生物学会を発足させることを知りました。日本共生生物学会の設立趣旨は、「近年、生物進化や生命現象のあらゆる場面で共生現象が大きく関わっていることを踏まえ、この分野の研究の発展を確実に進め、共生の視点を含む生命感を育むため、共生や寄生の生物学に関心のある研究者が、既存の学会の枠を超えて交流できる「場」を提供する。」というものです。日本原生生物学会の会員もその設立に関わっ



BPA 受賞者挨拶



BPA 受賞者挨拶

ているとのことでした。早々に、日本原生生物学会と日本共生生物学会の合同開催を石田 教授に提案したところ、快諾をいただきました。ということで、5月のゴールデンウィーク前に第50回日本原生生物学会大会第1回日本共生生物学会大会 合同実行委員会を立ち上げ、準備をスタートしました。

合同実行委員会では、面白い学会を開催しようという目的のもとに、活発な議論が行われました。合同大会開催のメリットを最大限利用し、面白い学会を実現するために、以下の5つのことが企画されました。

- ① 大会長は第50回日本原生生物学会大会長と第1回日本共生生物学会大会長の2名が担当する。→両学会が対等な立場で大会を運営することができました。
- ② 日本原生生物学会と日本共生生物学会共同のシンポジウムを企画する。→両学会員の密度の高い交流が実現しました。
- ③ 一般演題は全てポスター発表として登録し、口頭発表はそれらの中から優れたものをプログラム委員会で選抜する。→選抜はプログラム委員会の投票で行われ、ユニークな口頭発表セッションが実現しました。
- ④ ベストプレゼンテーション賞（BPA）は35歳以下（H30.3.31現在の年齢）の者を対象にして、受賞者の選定は、両学会から選出された5名ずつの審査員の合議により行う。→画期的な研究、ユニークな研究が選ばれました。
- ⑤ 18日の昼食時に企業によるランチョンセミナーを実施する。→企業が昼食のお弁当を準備してくれ、好評でした。



若手の会 会長挨拶

懇親会での会員各位の前向きな感想、お褒めの言葉から、合同実行委員会の意欲的な試みは、会員の皆様に評価されたと思います。

本合同大会では、両学会の一般会員 83 名、学生会員 59 名、非会員 10 名の計 152 名の参加がありました。このうち、原生生物学会の方で登録した一般会員は 42 名、学生会員は 31 名でした。原生生物学会の会員のうちかなりの方が日本共生生物学会の方で登録しておられたことが判り、原生生物学会員の正確な参加人数を把握できなかったことお詫びいたします。一方、合同大会の内容は、11 題の一般口頭発表、53 題の一般ポスター発表、合同シンポジウム (8 題)、共生ワークショップ (14 題) など、多彩なプログラムが用意されました。2 つの学会の会場を分けることなく、すべての参加者がすべての研究発表と討論に参加できる理想的な場を提供することができました。学会の総会だけは、別々の会場で開催しましたが、日本原生生物学会の学会賞と奨励賞の講演は日本共生生物学会の会員にも公開しました。

高校生にも研究発表の場を提供しました。高校生たちが、研究者との交流を通して研究への興味をさらに深め、次の研究へとつなげてくださればと期待しております。岡山大会の例に倣い、高等学校の教員・生徒の方々を全日程無料参加といたしました。

合同大会に先立って、17 日には原生生物学会若手の会による観察会と若手の会シンポジウム「最新の“見る”技術」(3 題)が開催され、多くの若手研究者が参加し、活発な議論が行われました。

本合同大会は、筑波大学生命の樹プロジェクトのご後援をいただき、合同シンポジウムの演者の旅費の支援をしていただきました。あらためて、生命の樹プロジェクトの関係者の方々にお礼申し上げます。

18 日の日本原生生物学会の総会では、日本原生生物学会・学会賞に児玉 有紀 会員 (島根大学)、奨励賞に矢吹 彬憲 会員 (海洋研究開発機構) の受賞の報告がなされ、総会後に受賞記念講演として、児玉 会員による「ミドリゾウリムシを用いた二次共生の成立機構の研究」、矢吹 会員による「新規系統の発見と理解から読み解く真核生物の多様性と進化プロセス」が行わ



高橋 三保子 先生のご挨拶



第 50 回大会 (つくば) 参加者一同

れました。同じく懇親会では、両学会の若手研究者を対象としたベストプレゼンテーション賞 (BPA) の授賞式を行いました。今年度は、丸山 萌 氏 (福井工大・院 応用理工) の「盗葉緑体の使用期限: *Rapaza viridis* の光合成活性」、北条 友貴 氏 (筑波大学・院 生命環境) の「鉾山跡地に生育するイタドリ (*Reynoutria japonica* Houtt.) の重金属耐性と内生菌の機能の解明」、白鳥 峻志 会員 (筑波大学 生命環境系) の「捕食能を持つ新規バクテリアの報告」、田村 望 会員 (奈良女子大・院 生物科学) の「*Blepharisma hyalinum* の表層顆粒の機能とその内容物の毒性」、桐間 惇也 会員 (兵庫県立大・院 生命理学) の「クラミドモナスの鞭毛関連タンパク質 FAP85 は Microtubule inner proteins の一つである」、古賀 大貴 会員 (法政大・院 生命科学) の「鞭毛軸糸の構造維持に異常を持つクラミドモナス突然変異株 *lpp1* の解析」、川船 かおる 氏 (東工大 生命理工学院) の「光合成生物の細胞

質内に共生するリケッチアのゲノム解析」の7名が選ばれました。

本合同学会を開催して、原生生物学と共生生物学には多くの接点があることが判りました。また、原生生物の進化における共生現象が、現在の生物界の形成に大きく影響していることが示されました。本合同大会において、それぞれの研究者が一同に会し、議論を深め、交流できたことは、今後の原生生物学と共生生物学の発展のために、大きな意味があったと思います。私が提示した4つの目的の第一番目、「原生生物に関心を持ち研究する人々の研究発表と情報交換の場である年大会の充実」は実現できたものと思います。

最後に、本学会の半世紀の活動を祈念する第50回大会 (つくば) から、バトンを次の半世紀への第一歩を踏み出す第51回大会 (島根大学) にお渡しいたします。風光明媚な松江の地で会員の皆様とお会いできますことを楽しみにしております。

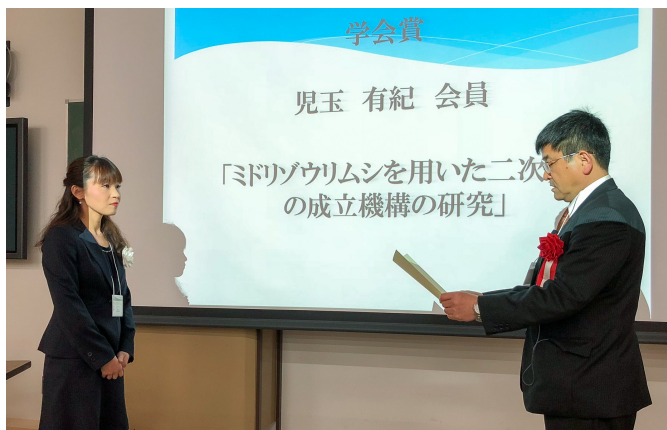
平成 29 年度 学会賞 受賞者コメント

児玉 有紀 (島根大学)

「ミドリゾウリムシを用いた二次共生の成立機構の研究」という研究タイトルで、名誉ある日本原生生物学会賞を受賞させていただくことができ、大変光栄に思います。ご推薦戴きました三輪 五十二 先生、選考委員の先生方に心より感謝申し上げます。また受賞に関わる研究をご指導頂きました藤島 政博 先生にお礼申し上げます。私が「細胞内共生」に興味を持ち始めたのは高校3年生の時でした。餌生物が消化を免れて細胞内に共生し、後にオルガネラとなる不思議な現象に夢中になりました。大学3年生の時の藤島 先生の講義でミドリゾウリムシと出会いました。ミドリゾウリムシは真核細胞の誕生と進化の解明に適したモデル生



受賞者と三輪 五十二 教授 (左) と藤島 政博 教授 (右)



受賞者と沼田 治 会長 (右)

物ですが、まだほとんど研究が進んでいないこと知り、自分が何か明らかにしたいと奮起して研究を始めました。その結果、学部4年でクロレラの再共生過程の全容と、再共生の成立に必須な4つのプロセスを明らかにすることができました (Kodama and Fujishima, *Protoplasma*, 2005)。以後は、それらのプロセスに関する現象を細胞生物学的な手法で明らかにし、2008年には学会の奨励賞を受賞させていただきました。現在は、細胞内共生成立の分子機構の解明を目的として研究を行なっています。本研究の成果は、細胞内共生に

よる細胞進化の機構の解明だけでなく、共生関係の維持を通じた生態系の保全等の問題解決にも貢献できると期待しています。2014年には、クロレラと共生前後のミドリゾウリムシのトランスクリプトーム解析を行い、共生前後で発現が変化する 6,698 の遺伝子を初めて明らかにしました (Kodama et al., BMC Genomics, 2014)。現在はこの延長上の研究として、クロレラの共生に伴う遺伝子発現の変化の解明を目指しています。島根大学に着任後は、地域貢献と社会貢献を目的

として、地元の企業との共同研究や、市民や小中高生や理科教員向けの講師なども積極的に引き受け、原生生物の魅力を伝える努力をしています。大会長を努めさせていただきます 10 月の第 51 回大会では、理科教育現場への原生生物学の普及を目的として、活性化委員会との関連シンポジウムを企画中です。この受賞を励みにして、原生生物学の発展や後継者の育成に貢献できるよう、研究を進めて参りたいと思います。今後ともご協力・ご支援を宜しくお願い申し上げます。

平成 29 年度 奨励賞 受賞者コメント

矢吹 彬憲 (海洋研究開発機構)

この度は、日本原生生物学会和文誌「原生生物」の発刊誠におめでとうございます。その記念すべき 1 巻 1 号にこうしてコメントを掲載できる機会をいただけたことを本当にありがたく思います。奨励賞へのご推薦をいただいた島野 先生をはじめ、いつもお世話になっている日本原生生物学会の多くの先生に支えていただいたからこそいただけた賞だと感じております。心から御礼申し上げます。

私は常々、若手研究者 (大学院生も含む) とバンドマンは似た存在だと思っておりました。日本武道館や東京ドームに立つことを夢見見ながら、アルバイトなどで生計を立てつつバンド活動に勤しんでいる若者は現代でも多くいると思います。同様に、未解明の事象を解決して学会や論文誌上で華々しく公表したいという熱い情熱を持ちながらも生活面では決して恵まれてはいない若手研究者も多くいます。方向性の違いで解散するバンドもあれば、テーマを変更したりラボを移籍する若手研究者も多くいます。そして残念なことに、バンドマンが全員メジャーデビューできるわけではないように、研究の世界から去っていく若手研究者もいます。これまでの研究活動を評価していただき今後のさらなる研究展開を後押ししていただき奨励賞は、バンドマンのキャリアパスに則れば、メジャーデビュー後の成果が認められての単独ライブ決定に相当するものなのではなかろうかと感じています。今後、全国ツアー、夢である東京ドーム公演を目指して、より一層研究に励まねばと身が引き締まる思いです。

2016 年に東京ドーム公演を終えた SU-METAL 女史 (BABYMETAL) は、“東京ドームに立って、ここがゴールではないと思いました。”と仰いました。私はこの言葉を聞いて、より高みを目指さし、そしてそこに到達した者にしか見えない景色があるということに改めて学ばされました。私の原生生物学研究は、もちろんまだまだ道半ばです。これから多くの先生や共同研究者、学生と協力していきながら、原生生物学、そして原生生物学会のますますの発展に貢献していく所存であります。そして、今見えている目標を大きく超え、その先にあるものを追いつける研究者でいたいとそう強く思えるようになりました。奨励賞、本当に有難うございました。



受賞者と沼田 治 会長 (右)

学会活性化委員会からのお知らせ

委員長・園部 誠司 (兵庫県立大学)

原生生物、特に単細胞で生活するものは形や行動、成体がバラエティーに富んでおり非常に興味深い生物種が多く存在しています。これらの生物種は研究材料として非常に興味深いものです。また、教育の場における教材としても非常に有用です。しかし一般にはアメーバやゾウリムシくらいは認知されていますが、その他の単細胞原生生物となるとほとんど知られていません。テトラヒメナはこれを材料とした研究が2回もノーベル賞を受賞した原生生物のヒーローですが、その名前を知っている人はほとんどいないと思われます。現在、日本では応用研究が重視され、基礎研究がやりにくくなっています。基礎研究の重要性は繰り返し言われていますが大きな流れにはなっていません。基礎研究は応用研究の基礎であり、基礎がなければ始まりません。したがって基礎研究が衰退すれば人類の発展は望めません。原生生物を用いた基礎研究を盛んにして、そこから生まれる応用研究が人類の未来を明るくしてくれる、そういう状況を作りたいですね。学会活性化委員会は日本原生生物学会の活性化に資するために活動していますが、学会の活性化にとどまらず広く社会に原生生物学の重要性、さらには基礎研究の重要性を認知させていくという大きな目標をもって活動していきたいと考えています。学会活性化は初めの一步と言えるでしょうか。

学会活性化のための方策としてどのようなことが考えられるでしょうか。原生生物学の認知度を上げる、原生生物を材料とした研究を盛んにする、会員数を増やす、などが考えられます。これらの方策を包括的に具体化するものとして、準会員制度を提案しました。原生生物の認知度を上げる最も有力な手段は、小中高の教育現場に原生生物を流布させることです。山口県岩国市にあるミクロ生物館では原生生物を中心とした展示を行っていますが、館長の末友 靖隆 博士(本学会会員)は近隣の小中学生を対象とした出前授業やワークショップを精力的に行っておられます。受講した子供たちの中には原生生物にすっかりはまって、研究者顔負けの知識を持つようになった子供も出てきています。私も年に数回、近隣の小学校に位相差顕微鏡を持ち込んでアメーバに観察会を行っています。高性能顕微鏡(単なる大学の実習用位相差顕微鏡ですが小学校にはまずありません)ということもありますが、アメーバを初めて見た子供たちの興奮はいつも私を喜ばせてくれます。このうちの一人でも原生生物にはまってくれれば、と思っています。こうした活動を全国レベルで展開するための手段として準会員制度の提案を行いました。幸い昨年の総会で会員の皆様にお認めいただくことができ、現在準備を進めているところです。準会員の対象は、まずは高等学校の教員の方々に絞りました。高校のクラブ活動では、非常に高いレベル

の研究が行われています。そうした研究の材料として、原生生物を取り上げてもらおうというのが狙いです。さらにその研究成果を年大会で発表してもらうことができれば、年大会の充実にもなりますし、学会員に対する刺激にもなると思います。また、準会員が年大会に参加することで、多くの会員と知り合いになると思います。そうすると現在行っている研究上の相談や新たな研究テーマの相談もできるようになります。出前授業なども気軽に頼めるようになるのではないのでしょうか。もちろん準会員ではない先生からの要望にこたえることは当然ですが、先生方には敷居が高いと思います。準会員制度はこの敷居をなくす方策でもあります。準会員制度を軌道に乗せ、発展させていくためには会員の皆様の協力が不可欠です。準会員制度の趣旨をご理解いただき積極的な協力をお願いいたします。

もう一つ、活性化委員会は、本学会の年大会や他学会の年大会で、シンポジウムやワークショップを企画し、実施しています。昨年度は日本微生物生態学会、日本藻類学会、日本動物学会、日本生物物理学会においてシンポジウムを開催しました。これらを通じて広い分野の研究者に原生生物の面白さ、重要性を理解していただけたのではないかと思います。これらの学会に所属する研究者が原生生物を材料として取り上げたり、本学会員との共同研究が盛んになれば、活性化委員会の活動の目標が達成されたといえます。この活動の継続のためには会員の皆様の協力が必要です。シンポジストとして発表をお願いすることもあると思います。また、これまでにない視点からのシンポジウムのテーマなどのアイデアがありましたら、ぜひ活性化委員会にご提案ください。今年の島根大会では学校教員の方々を対象としたシンポジウムを計画しております。授業の現場で直接役立つことを中心にしたものを検討しています。これは準会員制度の宣伝にもなるかと思っています。

原生生物学会若手の会は精力的に活動しています。年大会では毎年、原生生物の観察会やシンポジウムを開催しています。シンポジウムのテーマはいつも新鮮で興味深いものです。若手の会と活性化委員会の協力体制を確立すれば、学会活性化をさらに強力に推し進めていくことができるのではないかと考えています。

活性化委員会の役割は極端に言えば、全会員の皆様の学会活性化への、あるいは原生生物学活性化のための意識を高めていただくための音頭取りです。会員の皆様の協力が、我々活性化委員会が目標を達成するための原動力となります。重ねて皆様のご協力をお願い致します。

日本分類学会連合総会報告

生物多様性会議委員・島野 智之（法政大学）

国立科学博物館上野本館講堂

2018年1月6日（土）10:00～12:00

出席：島野 智之（委員）

永宗 喜三郎（会計・代理出席）

【報告事項】（注：必要なもののみ一部抜粋です）

（報告1）庶務（富川 光）

2017年度の活動

2017年4月1日

生物科学学会連合第15回定例会議出席

2017年4月13日

九州大学所蔵の博物館資料の保全に関する要望書を
九州大学総長宛に提出

2017年4月27日

第36回役員会を開催（東京大学総合研究博物館）

2017年6月30日

日本分類学会連合データベース委員会からのアンケート依頼（日本産生物種数リストの改訂および種名リスト作成の検討について）

2017年9月24日

広島大学大学院生物圏科学研究科主催シンポジウム
「ヒト、カブトガニ、干潟一海はだれのもの？」
後援

2017年10月7日

生物科学学会連合第16回定例会議出席

2017年12月30日

遺伝学用語の改訂について、日本遺伝学会宛に意見書を提出

（報告2）データベース（海老原 淳）

加盟団体に対して、日本に産する生物種数リストの改訂および種名リスト作成に関するアンケートを実施して、現状の把握と今後の活動方針についての検討を行った。「日本産生物種数調査」と「国内重要コレクション調査」の公開ページの維持管理を行った。

（報告3）メーリングリスト（三中 信宏）

メーリングリスト TAXA の会員数は2017年12月31日時点で「1,085名（2016年末から23名増）」

（報告4）その他

国立（沖縄）自然史博物館の設立について（村上 哲明 委員）
設立準備委員会設立 → 社団法人化、学術会議マス

タープラン 2017 に応募・採用された。内閣府・沖縄県への働きかけを行っている。シンポジウムを複数回開催

【審議事項】（一部抜粋）

（審議1）2018年度予算

2018年度の分担金 10,000円

予算案（一般会計）

Q: 国立自然史博物館設立に関する活動への予算は必要ないか？ → A: 現在のところ予算的な協力はなくても可能。

（審議2）その他

・和名に関して今後何らかのルール検討が必要なのではないか（大塚）【注：魚類に関する資料の配付があったので必要であれば、下記 島野までご連絡を頂ければ提供いたします】

コメント：（魚類学会）遺伝学等で使用する和名に対しても指針が必要。

（議長）和名のホモニムへの対応が必要。例：は虫類と魚類の「ウミヘビ」。

（細矢）ディベロッパーとしての立場だけでなく、ユーザーの立場も重視を。

（貝類学会）和名によって商業価値が変動する事例がある（例：アワビとトコブシ）。不当表示になる場合あり。

【特記】

当日、午後第17回分類学会連合公開シンポジウム「分類学に関わる法律および新しい情報収集ツール」が開催された。

ここでは、「ABS 関連実務と支援活動」「GBIF/GRBio/CC ライセンス」「DOI 登録」「ORCID」などの説明が具体的に行われた。

講演要旨は出席者の手元にありますので、ご連絡を頂ければ提供いたします。

連絡先 島野 智之（sim A hosei.ac.jp Aは@としてください）

学会等開催情報

◆日本原生生物学会・韓国原生生物学会合同大会

Joint Meeting of the Korean Society of Protistologists and the Japan Society of Protistology が下記の日程で開催されます。皆様ふるってご参加下さい。

日程：2018 年 7 月 13 日（金）～ 15 日（日）

場所：韓国 済州島（Jeju Island）Jeju International Marine Science Research & Education Center

(1) 大会スケジュール

7 月 13 日（金）ウエルカムレセプション（18:00 開会）

7 月 14 日（土）シンポジウム（9:00–15:20）・ポスターセッション（15:20–17:30）・懇親会

7 月 15 日（日）エクスカージョン

シンポジウムのタイトル：

“Emerging Young Researchers at the Cutting-edge of Protistology in Korea and Japan”

全ての参加者はポスター発表をすることが可能です（シンポジストも含める）。

(2) 詳細・参加登録

詳細および参加登録は日韓合同原生生物学会のウェブページ (<https://sites.google.com/site/jejumeeting/>) をご参照ください。

参加申し込みおよび発表の申し込みの締切は 5 月 25 日（金）です。

(3) その他

本件に関する問い合わせは担当の春本（国際委員）（harumoto@cc.nara-wu.ac.jp）までお願いします（"a" を @ に変更してください）。

◆その他

会議名：The XXII Meeting of the International Society of Evolutionary Protistology (ISEP18)

期 日：2018 年 5 月 27 日（日）～ 6 月 1 日（金）

開催場所：Droushia, Cyprus

連絡先等：大会 HP (<http://www.isep18.com/>)

会議名：2018 Ciliate Molecular Biology Conference

期 日：2018 年 7 月 17 日（水）～ 22 日（日）

開催場所：Washington, D.C., U.S.A.

連絡先等：大会 HP (<http://conferences.genetics-gsa.org/Ciliate/2018/index>)

会議名：Phycological Society of America and the International Society of Protistologists Conference 2018

期 日：2018 年 7 月 29 日（日）～ 8 月 2 日（木）

開催場所：Vancouver, Canada

連絡先等：大会 HP (<http://psa-isop2018.botany.ubc.ca/>)

会議名：The 14th International Congress of Parasitology (ICOPA 2018)

期 日：2018 年 8 月 19 日（日）～ 8 月 24 日（金）

開催場所：Daegu, Korea

連絡先等：大会 HP (<http://icopa2018.org/>)

会議名：The Asian Congress of Protistology (ACOP)

期 日：2018 年 11 月 23 日（金）～ 25 日（日）

開催場所：Guangzhou, China

若手の会 通信

会長挨拶

柴田 あいか (立命館大学)

新たに若手の会の代表を務めさせていただくことになりました, 立命館大学の柴田 あいかと申します. 副会長に就任された神戸大学の小林 真弓さんと共に, 新役員も増えて新体制となった原生生物学会若手の会を盛り上げていきたいです. 若手ならではの活動を積極的に行っていきたいと考えていますので, よろしくお願いたします.

私はミドリゾウリムシに共生するクロレラについて研究を行っており, 研究対象は主に緑藻ですが不思議でかわいい原生生物がみんな好きです. 私は 2014 年度から若手の会役員として参加しており, 若手の会の活動を通じていろいろな人と出会ったり, 新しいことを教えてもらったり素敵な機会を与えてもらいました. そこで, 今度は自分が中心となって, そのような機会を作っていきたいです. そのために, 若手の会役員にとどまらず, 若手研究者のみんなで参加できる企画を設け活動をもりあげていきたいので, 若手の皆様ご参加どうぞよろしくお願いいたします. そして, ベテランの先生方も若手への協力とアドバイスをどうぞよろしくお願いいたします.

「原生生物学会若手の会合宿 2017 in 淡路島」のご報告

樋口 里樹 (神戸大学)

2017 年 8 月 17-18 日, 淡路島にある神戸大学内海域環境教育研究センターマリンスイトにて若手の会の合宿を行いました. 原生生物を対象にする若手研究者たちの交流を目的とし, 1 日目には各々の研究紹介とディスカッション, 2 日目には野外でのサンプリングとプランクトンの同定をしました.

神戸三宮から高速バスで約 1 時間, 淡路島の北端近くにマリンスイトは位置します. 合宿の日は, 東京で記録的な長雨が続けていた時期でしたが, 淡路島は晴天に恵まれ施設の目の前には海が広がっていて, 夏を絵に描いたような環境でした. 参加者は 7 大学から教員 3 名, ポスドク 3 名, 学生 9 名の計 15 名が集まりました. 若手の会の役員を中心に人伝に集めたメンバーだったので, 原生生物学会の本会に参加したことがな



若手の会合宿 2017 in 淡路島

い人も多く, 参加者同士のほとんどは初対面で新鮮でした.

1 日目の研究紹介では, 1 人 15 分の持ち時間でしたが, しばしば議論が白熱し, 終了予定時刻を 1 時間以上過ぎるほどでした. 全員が原生生物を研究しているといっても, 扱っている生物は繊毛虫, 藻類, アメーバ, 太陽虫と様々で分野也多岐にわたっており, 意見を交わすことで新たな刺激を受けることができました. 学生がほとんどだったこともあり, ざつくばらんなやり取りができ, 研究を始めて数か月の学部生でも研究背景や方針をしっかりと発表し議論にも参加していました.

2 日目にはマリンスイト周辺の淡水 (大谷池, 北畑池, 中持) と海水 (岩屋港) を採集し, マリンスイトの実験室で顕微鏡を用いてプランクトンの種同定をして, 原生生物生息地マップを作成しました. 野外サンプルの採集や観察が初めてという参加者もいて, プランクトンネットを引くのも, 図鑑とにらめっこしながら顕微鏡を覗くのも大いに盛り上がりしました. また, 皆で協力して作業をする体験は参加者同士の距離を一気に縮めました.

他大学の研究者, 特に学生同士での交流を持つ機会はありません. この合宿での経験は研究を続けていく上で大きな糧になると思います. 今年度も若手の会合宿をする予定ですので, 興味がある方は若手の会にご連絡ください.

最後になりましたが, 施設利用責任者として引率してくださった神戸大学の洲崎 敏伸 先生と, 野外採集と種同定, 実験室の利用に協力してくださった神戸大学の鈴木 雅大 先生に感謝申し上げます.

「原生生物フェスティバル 2017 in 筑波」のご報告

内之宮 光紀(理化学研究所)

2017年11月17日に行われた第50回日本原生生物学会における若手の会企画として、原生生物フェスティバルを開催しました。

原生生物フェスティバルは観察会&分議会とシンポジウムの二部構成で行いました。観察会&分議会においては多くの先生方や研究室の皆さまの協力により多くの生物を展示することができました。また、昨年作成したガイドブックは、筑波大学の学生の方々の協力によって、さらに充実したものになりました。さらに、今回は神戸大学の洲崎 敏伸 先生のご協力により多くのグッズを販売することができ、原生生物学の普及に貢献できたのではないかと考えております。

シンポジウムは「最新の「見る」技術」と題し、「見る」ことに関わるさまざまな技術について3名にご講演いただきました。

松田 厚志さん(情報通信研究機構未来 ICT 研究所)には 3D structured illumination microscopy (3DSIM) を用いた、光の回折限界を超えた構造の観察技術についてお話いただきました。モアレを利用して画像を再構築するなどの原理も含めて非常にわかりやすく解説していただきました。

ソン チホンさん(生理学研究所)には 2017 年のノーベル化学賞の対象にもなった、クライオ電子顕微鏡について解説していただきました。観察前の生物試料を処理する際の困難をどのように解決するか、それによってどのようなものが見えるかを、実際のたんぱく質の例を示しながらお話いただきました。

瀧 雅人さん(理化学研究所)には近年話題の深層学習を用いた画像認識についてお話いただきました。



原生生物フェスティバル 2017 in 筑波

学習に多量の画像データが必要なことがハードルですが、それをクリアできれば原生生物学においても強力なツールになるのではないかと感じました。

原生生物フェスティバルの開催にご協力いただいた、筑波大学の沼田 治 先生、中野 賢太郎 先生、実行委員の先生方、グッズ販売にご協力いただいた洲崎 敏伸 先生、展示用の生物をご提供いただいた研究室の皆様、グッズの作成・展示にご協力いただいた皆様、スタッフの皆様、そして会場にお越しいただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

ミクロ生物フェスティバル 2017 in 筑波 世話人・スタッフ(順不同): 内之宮 光紀(理化学研究所), 樋口 里樹(神戸大学), 早川 昌志(Life is small Project), 梁瀬 隆二(兵庫県立大学), 桐間 惇也(兵庫県立大学), 小林 真弓(神戸大学), 柴田 あいか(立命館大学), 末友 靖隆(岩国市ミクロ生物館)

日本原生生物学会若手の会では、皆様のご意見を募集しています。ご意見、ご要望をお寄せ下さい。

また、若手の会役員も随時募集しています。興味のある方は (young.protistologists.jsp@gmail.com) までご連絡ください。

若手の会ホームページ <https://sites.google.com/site/youngprotistologists/>

2018 年度 若手の会役員

会長
柴田 あいか(立命館大学)
副会長
小林 真弓(神戸大学)
会計
樋口 里樹(神戸大学)

Web

桐間 惇也(アップ教育企画)
梁瀬 隆二(筑波大学)
役員
池田 理佐(岡山大学)
井坂 友紀(奈良女子大学)
内之宮 光紀(電力中央研究所)

大北 千紗(奈良女子大学)

唐澤 宗宏(神戸大学)

佐々木 愛澄(奈良女子大学)

末友 靖隆(岩国市ミクロ生物館)

塚越 亮允(鳥取大学)

中村 憲章(福井県立大学)

早川 昌志

平成 29 度評議員会

日 時：平成 29 年 11 月 17 日（金）16:00～17:30

会 場：〒305-8577 つくば市天王台 1-1-1

筑波大学筑波キャンパス中地区第 2 エリア

B 棟 B801

出席者：沼田 治, 岩本 政明, 北出 理, 児玉 有紀,
小林 富美恵, 園部 誠司, 月井 雄二, 道羅
英夫, 永宗 喜三郎, 春本 晃江, 廣野 雅文,
福田 康弘, 細谷 浩史, 八木田 健司

欠席者：遠藤 浩, 西山 学即, 松岡 達臣

議 題：総会提出議題等の検討

平成 29 年度総会議事

I 報告事項

1. 庶務関係

細谷 浩史・北出 理 庶務担当より、以下の報告があった。

イ. 平成 29 年度メール評議員会と事務局会議での審議決定事項について報告された。

ロ. 会員の異動（平成 29 年 11 月 15 日現在）

新入会 18 名, 退会 8 名

(昨年報告数)		
賛助会員	1 団体	(1 団体)
名誉会員	7 名	(7 名)
終身会員	5 名	(4 名)
一般会員	113 名	(114 名)
学生通常会員	36 名	(33 名)
学生 1 年会員	11 名	(4 名)
合計	173 名	(163 名)

2. 生物多様性会議関係

永宗 喜三郎 生物多様性会議委員代理より、以下の報告があった。

イ. 日本分類学会連合第 16 回総会の報告があった。内容は日本産生物種数調査について、国立沖縄自然史博物館設立の進捗状況について、及び生物多様性条約 ABS 問題についてであった。

3. 編集関係

岩本 政明 副編集長より、以下の報告があった。

イ. 平成 29 年の投稿論文数と審査状況について。

ロ. 平成 29 年の発行状況（原生動物学雑誌第 50 巻およびニューズレター No. 32, 33）について。

ハ. 原生動物学雑誌の J-STAGE における閲覧状況について。

ニ. 英文誌名変更の進捗状況について、すでに J-STAGE 上に新サイトが完成し、最初の論文が受理され次第新サイトで公開予定であることが報告された。

ホ. 英文誌の誌面デザインについて。

ヘ. 英文誌の投稿規定について、オープンアクセス誌であること、原生生物関連全分野をカバーすること、掲載料を徴収しないこと、著作権に CC-BY を採用することを明記する方針が報告された。

ト. 和文誌「原生生物」の編集方針について、発行回数と時期は NL を大筋で踏襲する、和文の総説と原著・「原生動物学雑誌」の論文以外の記事・NL の内容をコンテンツとする、デザインは原生動物学雑誌を踏襲する、という方針が説明された。

4. 学会賞等選考委員会報告

月井 雄二 委員長から、以下の報告があった。

イ. 学会賞に児玉 有紀 会員「ミドリゾウリムシを用いた二次共生の成立機構の研究」が、奨励賞に矢吹 彬憲 会員「新規系統の発見と理解から読み解く真核生物の多様性と進化プロセス」が選ばれた事が報告された。また、学会賞および奨励賞に関する内規変更を検討し、検討結果が評議員会で承認されたこと、学会賞等選考基準の追加項目を委員会で検討し、今後評議員会に提案する予定であることが報告された。

5. 活性化委員会報告

園部 誠司 委員長より、以下の報告があった。

イ. 本年度に活性化委員会の企画で開催された 4 件のシンポジウム・ワークショップについて報告があった。これらは、日本微生物生態学会での「原生生物の環境センシングと運動」、日本藻類学会の「原生生物学出張ワークショップ：原生生物学会的藻類学研究の紹介」、日本生物物理学会の「原生生物の行動」、日本動物学会での「原生生物の魅力と研究材料としての有用性」である。

6. 国際委員会報告

春本 晃江 委員より、以下の報告があった。

イ. ICOP の報告 (参加者約 480 名, 日本から 19 名) と, そこで開催された ISOP の business meeting 及び ICOP 委員会の報告があった。ICOP が ISOP 傘下の Standing Committee となり, 次回 ICOP は 2021 年に韓国 (ソウル) での開催となった。

ロ. ACOP の状況についての報告があった。次回トルコで開催できるかどうかは未定である。

ハ. 韓国との Joint Meeting について

7. その他

イ. 日韓ジョイントミーティングに関して, 日韓 WG の春本 晃江 評議員より報告があった。2015 年の東京大会でのシンポジウム以降の動きと WG 立ち上げの経緯についての説明ののち, 現在の次期ジョイントミーティング暫定案は 2018 年に済州島で "Emerging Young Researchers at the Cutting-edge of Protistology in Korea and Japan" のテーマで両国 6 名ずつのスピーカーでシンポジウムを行うものであり, 日本側オーガナイザーに沼田会長と春本委員を予定することが説明された。このジョイントミーティングに日本原生生物学会として協力する旨が報告された。

ロ. 内之宮 光紀 若手の会代表より, 若手の会の平成 29 年度活動報告と会計報告があった。

II 審議事項

1. 編集関係

イ. 岩本 政明 副編集長より, 新雑誌立ち上げに関連して編集委員を増員する方針が提案され, 増員数は委員会に一任することとあわせて承認された。

2. 会計関係

イ. 平成 28 年度会計決算報告および会計監査報告

永宗 喜三郎 会計担当より報告がなされた後, 菅井俊郎, 楠岡 泰 両監事より監査報告があり, 承認された。

ロ. 平成 29 年度中間報告

永宗 喜三郎 会計担当より平成 28 年度の中間報告がなされ, 承認された。

ハ. 平成 30 年度予算案について

永宗 喜三郎 会計担当より次年度の予算案について報告がなされ, 原案通り承認された。

3. その他

イ. 園部 誠司 活性化委員会委員長より, 小学校, 中学校, 高校の教員を対象とする準会員制度を設けることが提案され, 会費を年 1,000 円, 大会参加費を無料とすることを含め承認された。また, 高校生は大会で口頭発表可能とし, 申込多数の場合大会長判断でポスターに振り分けること, 小中学生はポスター発表とすることが承認された。関連して, 学会賞 (BPA) に小中高校生枠を大会長判断で設け, 準会員の BPA は一般会員と同等条件とすることが承認された。また, 生徒の研究指導補助が対応可能な会員をアンケートで募り, 活性化委員会あるいは相談窓口が問合せ内容に適した会員を紹介すること, 準会員の勧誘方法を今後議論することが承認された。

ロ. 日韓ジョイントミーティング WG の春本 晃江 評議員より, 次回ジョイントミーティングのシンポジウム演者と大学院生・ポスドクの参加者に対し総額上限 50 万円の支援を行う提案があり, 金額と人数の内訳を WG に一任することを含めて承認された。

平成 28 年度 日本原生生物学会一般会計決算報告

1. 収入の部

科 目	予算額	決算額
前年度繰越金	2,300,000	2,664,935
学会費 (*1)	873,000	617,000
賛助会費	0	0
寄付	0	0
雑収入 (*2)	10,000	22,771
利息	533	303
計	3,183,533	3,305,509

*1 : 学会費納入率 81.5%, *2 : 別刷代 22,771 円

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額
学会誌印刷代 (含郵送費)	200,000	171,914
編集諸経費・謝金	50,000	77,659
NL 印刷代・諸経費	10,000	4,420
庶務諸経費・謝金	50,000	33,602
会計諸経費・謝金	10,000	2,477
大会補助費	200,000	200,000
奨励賞副賞費	40,000	0
若手の会助成金	50,000	50,000
日本分類学会連合分担金	10,000	10,000
日本分類学会連合等会議費旅費	10,000	0
通信費	15,000	0
振替手数料	3,000	1,512
小 計	648,000	551,584
次年度繰越金	2,535,533	2,753,925
計	3,183,533	3,305,509

平成 28 年度 日本原生生物学会特別会計 (学会基金)
決算報告

1. 収入の部

科 目	予算額	決算額
前年度繰越金 (定期預金)	1,033,871	1,033,999
利息	300	124
計	1,034,171	1,034,123

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額
	0	0
次年度繰越金	1,034,171	1,034,123
計	1,034,171	1,034,123

平成 28 年度 日本原生生物学会特別会計 (国際交流基金) 決算報告

1. 収入の部

科 目	予算額	決算額
前年度繰越金	952,415	952,573
利息	300	114
計	952,715	952,687

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額
国際学会参加援助金	450,000	0
振込手数料	0	0
次年度繰越金	502,715	952,687
計	952,715	952,687

平成 30 年度 日本原生生物学会一般会計予算案

1. 収入の部

科 目	予算額
前年度繰越金	2,240,461
編集経費繰越分*	500,000
学会費	862,000
雑収入	10,000
利息	23
計	3,612,484

*原生動物学雑誌 2010 年以前の J-STAGE 登載 外注費用

2. 支出の部

科 目	予算額
学会誌印刷代 (含郵送費)	50,000
編集諸経費・謝金	510,000
学会活性化委員会経費	200,000
庶務諸経費・謝金	50,000
会計諸経費・謝金	10,000
大会補助費	200,000
奨励賞副賞費	40,000
若手の会助成金	50,000
日本分類学会連合分担金	10,000
日本分類学会連合会議費旅費 (2名分)	10,000
通信費 (サーバー利用料)	15,000
振替手数料	3,000
支出総計	1,148,000
次年度繰越金	2,464,484
計	3,612,484

平成 30 年度 日本原生生物学会特別会計（国際交流基金）予算案

1. 収入の部

科 目	予算額
国際交流基金・前年度繰越金	952,695
利息	8
計	952,703

2. 支出の部

科 目	予算額
国際学会参加援助金	500,000
次年度繰越金	452,703
計	952,703

平成 30 年度 日本原生生物学会特別会計（基金）予算案

1. 収入の部

科 目	予算額
前年度繰越金	1,034,133
利息	10
計	1,034,143

2. 支出の部

科 目	予算額
	0
支出総計	0
次年度繰越金	1,034,143
計	1,034,143

会則など

日本原生生物学会会則

第 1 条 本会は日本原生生物学会（Japan Society of Protistology）と称する。

第 2 条 本会は原生生物に関する研究をすすめる、その知識の普及、向上を図ることを目的とする。

第 3 条 第 2 条の目的を達成するために、年 1 回大会を開催し、会誌を発行するほか必要な事業を行う。大会においては、本会の運営を議する総会および学術講演を行う。総会および学術講演会は、それぞれ臨時にまた別個に開くことができる。これらの会合は会長の委嘱する委員が運営する。会誌は原則として年 1 回発行する。このほか、不定期の別刊を発行することがある。但し、別刊は実費をもって会員に配布する。

第 4 条 本会会員は正会員、賛助会員および名誉会員とする。正会員は年会費 6,500 円（学生の場合は 2,500 円）を前納するものとし、会の主催する各種の会合に参加し、評議員を互選し、会誌に投稿し、会誌の無料配布をうけることができる。賛助会員は本会の主旨に賛同し、会の維持発展のため一口 10,000 円以上を納入するものとし、会誌の無料配布をうけることができる。名誉会員の推薦は評議員会で決定する。

第 5 条 本会運営のために、会長 1 名、副会長 1 名、評議員および監事それぞれ若干名をおく。会長および評議員はそれぞれ会員の選挙によって決定する。なお、会長は副会長を評議員から 1 名任

命する。また、会長は必要により若干名の評議員を別に指名することができる。監事は評議員会の議を経て評議員以外の会員から会長が委嘱する。会長、評議員および監事の任期は 3 年とし、会長および評議員は引き続き 3 選はできない。会長は会を代表して会務を統括する。評議員は会務を処理し、会長の指名によって庶務、会計および編集の業務を分担する。監事は会計を監査する。

第 6 条 本会の事務年度は暦年とする。

第 7 条 本会に入会を希望するものは、別に定める手続きによって申し込むものとする。

第 8 条 会則の変更は評議員会の議を経て、総会において行う。

学会賞等に関する内規

平成 15 年 11 月制定
平成 16 年 11 月改訂
平成 17 年 11 月改訂
平成 18 年 11 月改訂
平成 19 年 11 月改訂
平成 20 年 11 月改訂
平成 23 年 11 月改訂
平成 24 年 11 月改訂
平成 25 年 5 月改訂
平成 26 年 5 月改訂

本学会に、日本原生生物学会賞、日本原生生物学会教育賞、日本原生生物学会奨励賞および日本原生生物

学会ベストプレゼンテーション賞授賞制度をおく。

1. 学会賞 (The Award of the Japan Society of Protistology in the Field of Protistological Research) は、日本原生生物学会会員 (以下、「会員」という.) の原生生物学に関するこれまでの研究業績を評価し、更なる発展を期待するものである。
2. 教育賞 (The Award of the Japan Society of Protistology in the Fields of Education and Social Contribution) は、会員の原生生物学に関する教育や社会貢献・啓蒙についてのこれまでの業績を評価し、更なる発展を期待するものである。
3. 奨励賞 (The Encouragement Award for Young Protistologists) は、若手の会員 (博士号取得後 10 年以内) の今後の飛躍を奨励するものである。
4. ベストプレゼンテーション賞 (略称 : BPA: Best Presentation Award of the Japan Society of Protistology) は、若手の会員 (6 月末日で満 35 歳以下) の今後の飛躍を奨励するものである。
5. 学会賞、教育賞、および奨励賞の受賞者は、会員の中からそれぞれ原則として年に 1 名とする。
6. 学会賞、教育賞の候補者は自薦でなく会員からの推薦とする。推薦者は候補者の現・元指導者でないことが望ましい。
7. 奨励賞候補者は会員からの推薦の他、自薦も可とする。
8. 学会賞候補者を推薦するものは、推薦書様式と主要論文別刷り 5 編、それぞれ 3 部ずつ (2 部はコピーでもよい) を学会事務局に提出する (郵送または電子メールに添付した PDF ファイルでもよい)。
9. 教育賞候補者を推薦するものは、推薦書様式 3 部 (2 部はコピーでもよい) を学会事務局に提出する (郵送または電子メールに添付した PDF ファイルでもよい)。
10. 奨励賞候補者を推薦するものは、推薦書様式と論文別刷り等参考となるもの、それぞれ 3 部ずつ (2 部はコピーでもよい) を学会事務局に提出する (郵送または電子メールに添付した PDF ファイルでもよい)。
11. 学会賞、教育賞および奨励賞推薦の締切りは毎年 6 月末日とする。
12. 学会賞、教育賞および奨励賞については、評議員の互選により学会賞等審査委員 3 名および選考委員長 1 名 (いずれも任期 3 年) を選出して審査を行い、結果を評議員会に諮って受賞者を決定する。
13. ベストプレゼンテーション賞授賞対象者は第一著者の発表者とし、件数は 2 件とする。受賞者の選考は、審査対象となる発表をすべて聴講できる評議員が行い、学会賞等選考委員会委員長が BPA 選考委員長をつとめる。

付則

1. 平成 15 年度以前の「日本原生動物学会奨励賞」については、英文「The Award of the Japan Society of Protozoology」をそのまま同じとして、和文の名称を「日本原生動物学会賞」に代えて使用することとする。
2. 平成 26 年度より「日本原生動物学会賞」、「日本原生動物学会教育賞」、「日本原生動物学会奨励賞」および「日本原生動物学会ベストプレゼンテーション

賞」は、それぞれ、「日本原生生物学会賞」、「日本原生生物学会教育賞」、「日本原生生物学会奨励賞」および「日本原生生物学会ベストプレゼンテーション賞」として、また、それぞれの英文の名称を「The Award of the Japan Society of Protistology in the Field of Protistological Research」、「The Award of the Japan Society of Protistology in the Fields of Education and Social Contribution」、「The Encouragement Award for Young Protistologists」および「Best Presentation Award of the Japan Society of Protistology」に改称する。

名誉会員推薦の内規

平成 5 年 8 月制定
平成 15 年 11 月改訂
平成 26 年 10 月改訂

日本原生生物学会会則第四条の規定に従い、下記のとおり評議員会における名誉会員選考内規を定める。

1. 名誉会員は本学会の発展 (*) と原生生物学の進歩に著しい功績のあった正会員で会員歴 20 年以上、年齢 70 歳以上であることを原則とする。但し、特に顕著な功績者は会員歴、年齢を問わない。
2. 外国国籍を有し、学術上の功績顕著で本会に特に功績のあったもの。
3. 名誉会員は年会費および大会費を免除され、会誌の無料配布を受ける。
4. 名誉会員候補者は評議員によって推薦され、推薦状、候補者の略歴および業績目録を会長に提出し、評議員会で決定する。

* 申し合わせ事項

- ・ 3 期 (9 年間) 以上評議員を務めた者
- ・ 会長経験者

学会賞受賞者名一覧等

日本原生生物学会賞受賞者名

- 1991 年 沼田 治 (筑波大学)
テトラヒメナの多機能タンパク質の研究
- 1992 年 田邊 和裕 (大阪工業大学)
マラリア原虫の寄生に関する分子生物学的研究
- 1993 年 彼谷 邦光 (国立環境研究所)
環境適応における脂質分子の役割
- 1994 年 今井 壯一 (日本獣医畜産大学)
ルーメン内繊毛虫の分類学的研究
- 1995 年 見上 一幸 (宮城教育大学)
ゾウリムシの二核性と核分化の研究
- 1996 年 藤島 政博 (山口大学)
ゾウリムシとホロスポラの共生における宿主-共生生物間相互作用
- 1997 年 (受賞者なし)

- 1998 年 芳賀 信幸 (石巻専修大学)
イマチユリン：未熟期の分子機構
- 1999 年 廣野 雅文 (東京大学)
クラミドモナスの非保存的アクチン
- 2000 年 松岡 達臣 (高知大学)
繊毛虫ブレファリスマのキノン光センサーと光シグナリング
- 2001 年 長澤 秀行 (帯広畜産大学)
トキソプラズマ感染に対する宿主免疫システム
- 2002 年 春本 晃江 (奈良女子大学)
繊毛虫における細胞間相互作用
- 2003 年 洲崎 敏伸 (神戸大学)
ユーグレナの細胞体変形運動
- 2004 年 (受賞者なし)
- 2005 年 (受賞者なし)
- 2006 年 (受賞者なし)
- 2007 年 (受賞者なし)
- 2008 年 (受賞者なし)
- 2009 年 (受賞者なし)
- 2010 年 岩本 政明 (情報通信研究機構)
テトラヒメナの大核と小核の核膜孔複合体タンパク質の研究
- 2011 年 (受賞者なし)
- 2012 年 (受賞者なし)
- 2013 年 (受賞者なし)
- 2014 年 月井 雄二 (法政大学)
接合型の遺伝解析に基づくゾウリムシの種分化過程に関する研究
- 2015 年 園部 誠司 (兵庫県立大学)
原生生物における運動の分子機構に関する研究
- 2016 年 小林 富美恵 (杏林大学)
マラリア原虫感染に対する宿主免疫機構
- 2017 年 児玉 有紀 (島根大学)
ミドリゾウリムシを用いた二次共生の成立機構の研究

日本原生生物学会教育賞受賞者名

- 2016 年 楠岡 泰 (琵琶湖博物館)
微小生物の魅力を伝える琵琶湖博物館
- 2017 年 (受賞者なし)

日本原生生物学会奨励賞受賞者名

- 2004 年 杉浦 真由美 (奈良女子大学)
繊毛虫ブレファリスマにおける接合誘導物質の分子生物学的研究
- 2005 年 有川 幹彦 (奈良女子大学)
太陽虫の細胞質および核におけるCa²⁺依存性収縮系の解析
- 2006 年 (受賞者なし)

- 2007 年 西原 絵里 (東京医科歯科大学)
Amoeba proteus の収縮胞における水集積機構の研究
- 2008 年 児玉 有紀 (筑波大学)
ミドリゾウリムシと共生クロレラの細胞内共生成立機構の研究
Kim Thi Phuong Oanh (Vietnam Academy of Science and Technology)
Stop codon reassignment in ciliates: evidence for different modes of stop codon recognition by ciliate eRF1s
- 2009 年 福田 康弘 (東北大学)
Nuclear proteins and chromosome structures of the ancestral dinoflagellate *Oxyrrhis marina*
- 2010 年 保科 亮 (立命館大学)
ミドリゾウリムシ共生藻の分類学的研究
- 2011 年 明松 隆彦 (ヨーク大学)
繊毛虫テトラヒメナのプロテオーム核死
- 2012 年 (受賞者なし)
- 2013 年 (受賞者なし)
- 2014 年 西上 幸範 (京都大学)
試験管内再構築系を用いたアメーバ運動における細胞質ゾルーゲル変換機構に関する研究
- 2015 年 (受賞者なし)
- 2016 年 末友 靖隆 (岩国市ミクロ生物館)
原生生物の認知度向上と教育分野への利活用
- 2017 年 矢吹 彬憲 (海洋開発研究機構)
新規系統の発見と理解から読み解く真核生物の多様性と進化プロセス

これまでの大会開催地及び大会長

	開催地	開催年度	大会長
第 1 回	小平市	昭和 42 年	藤田 潤吉
第 2 回	吹田市	昭和 43 年	猪木 正三
第 3 回	広島市	昭和 44 年	尾崎 佳正
第 4 回	東京都	昭和 45 年	松林 久吉
第 5 回	徳島市	昭和 46 年	尾崎 文雄
第 6 回	仙台市	昭和 47 年	樋渡 宏一
第 7 回	奈良市	昭和 48 年	稲葉 文枝
第 8 回	東京都	昭和 49 年	石井 圭一
第 9 回	大阪市	昭和 50 年	高田 季久
第 10 回	東京都	昭和 51 年	盛下 勇
第 11 回	岐阜市	昭和 52 年	野澤 義則
第 12 回	横浜市	昭和 53 年	斎藤 実
第 13 回	吹田市	昭和 54 年	中林 敏夫
第 14 回	つくば市	昭和 55 年	渡辺 良雄
第 15 回	広島市	昭和 56 年	重中 義信
第 16 回	東京都	昭和 57 年	石井 俊雄
第 17 回	津 市	昭和 58 年	安達 六郎
第 18 回	東京都	昭和 59 年	浅見 敬三
第 19 回	大分県	昭和 60 年	山高 里盛
第 20 回	東京都	昭和 61 年	小山 力
第 21 回	山口市	昭和 62 年	星出 一巳
第 22 回	つくば市	昭和 63 年	渡辺 良雄

第 8 回 国際原生動物学会

つくば市	平成 元年	樋渡 宏一
第 23 回 長崎市	平成 2 年	神原 廣二
第 24 回 伊勢原市	平成 3 年	金田 良雅
第 25 回 奈良市	平成 4 年	菅沼 美子
第 26 回 石巻市	平成 5 年	樋渡 宏一
第 27 回 帯広市	平成 6 年	鈴木 直義
第 28 回 小金井市	平成 7 年	鶴原 喬
第 29 回 東広島市	平成 8 年	細谷 浩史
第 30 回 水戸市	平成 9 年	三輪 五十二
第 31 回 岐阜市	平成 10 年	野澤 義則
第 32 回 仙台市	平成 11 年	渡辺 彊
第 33 回 金沢市	平成 12 年	遠藤 浩
第 34 回 神戸市	平成 13 年	洲崎 敏伸
第 35 回 高知市	平成 14 年	松岡 達臣
第 36 回 東京都	平成 15 年	今井 壯一
第 37 回 山口市	平成 16 年	藤島 政博
第 38 回 帯広市	平成 17 年	長澤 秀行
第 39 回 神崎市	平成 18 年	高橋 忠夫
第 40 回 富山市	平成 19 年	野口 宗憲
第 41 回 つくば市	平成 20 年	沼田 治
第 42 回 石巻市	平成 21 年	芳賀 信幸
第 43 回 水戸市	平成 22 年	三輪 五十二
第 44 回 奈良市	平成 23 年	春本 晃江
第 45 回 姫路市	平成 24 年	園部 誠司
第 46 回 東広島市	平成 25 年	細谷 浩史
第 47 回 仙台市	平成 26 年	見上 一幸
第 48 回 東京都	平成 27 年	八木田 健司
第 49 回 岡山市	平成 28 年	安藤 元紀
第 50 回 つくば市	平成 29 年	沼田 治

国際委員：

春本 晃江，八木田 健司

学会活性化委員会委員：

園部 誠司（委員長），児玉 有紀，島野 智之，
杉浦 真由美，野田 悟子，細谷 浩史，矢吹 彬憲

生物多様性会議委員：

島野 智之

評議員：

岩本 政明，遠藤 浩，北出 理，児玉 有紀，
小林 富美恵，園部 誠司，道羅 英夫，
永宗 喜三郎，西山 学即，春本 晃江，廣野 雅文，
福田 康弘，細谷 浩史，松岡 達臣，八木田 健司

会長・副会長・各種委員・評議員一覧

(平成 30 年 5 月 20 日現在)

会 長：沼田 治

副 会 長：小林 富美恵

庶 務：細谷 浩史

庶務補佐：北出 理

会 計：永宗 喜三郎

編 集：

廣野 雅文（編集長），岩井 草介（副編集長），
岩本 政明（副編集長），細谷 浩史，
道羅 英夫（「原生生物」担当），
西山 学即（「原生生物」・HP 担当），
西上 幸範（HP 担当）

監査委員：

楠岡 泰，菅井 俊郎

学会賞等選考委員：

岩本 政明，園部 誠司

事務局からのお知らせ

庶務 細谷 浩史 (神奈川大学)・庶務補佐 北出 理 (茨城大学)

このたび、日本原生生物学会より新しい和文誌「原生生物」が刊行されることになりました。新雑誌刊行までに至る編集委員会を中心とした皆様のご努力に感謝申し上げます。

さて、本誌の冒頭でお知らせ致しました通り、本学会でご活躍なさっておられました法政大学教授 月井 雄二 博士が 2 月に急逝されました。改めてお悔やみを申し上げます。本学会では、月井 先生を名誉会員として推挙する旨、評議員会でお認め頂きました。また、本

学会の選挙システムの電子化を計画し、併せて評議員会でお認め頂きました。このほかに、日本学術会議の「協力学術研究団体」指定を目指して直接学術会議事務局 (東京青山) の担当者とやりとりを現在続けております。

今後とも学会会員の皆様から御支持をいただけるよう、私達も努力を積み重ねて行きたいと存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

編集委員会からのお知らせ 「新雑誌『原生生物』について」

編集委員会 編集長 廣野 雅文 (法政大学)

日本原生生物学会より新しい和文誌「原生生物」が刊行されることになり、この度、こうして皆様に配信する運びとなりました。この機会に、編集委員会より、この雑誌が生まれた経緯と役割について簡単に説明させていただきます。

前年まで、当学会は「原生動物学雑誌 (Japanese Journal of Protozoology)」と「Protistology Newsletter (日本原生生物学会会報)」という 2 つの刊行物を発行してきました。原生動物学雑誌は英文と和文の学术论文や寄稿文 (追悼文) など、Newsletter は大会の案内や各種委員会・事務局からの報告などを掲載するという役割分担でした。しかし、2016 年度の総会で、原生動物学雑誌の完全電子ジャーナル化、和英分冊、学会名に合わせた雑誌名の変更などの方針が決定され、その結果として、先日、新しい国際英文誌 Journal of Protistology が創刊されました。これに伴い、これまで原生動物学雑誌に掲載されていた和文の学术论文などを掲載する雑誌が必要となり、Newsletter と統合してこの和文誌

「原生生物」が創刊されることになりました。

従いまして、この「原生生物」誌は、総説を始めとする和文の学术论文、寄稿文などを掲載するとともに、学会の会報としての役割を担う雑誌です。原生動物学雑誌は 50 年もの長い歴史を持つ雑誌で、その間に掲載された和文総説は、原生生物学という学問分野を広く紹介する上で極めて重要な役割を担ってきました。また、Newsletter は大会に関する情報や学会の多様で活発な活動を伝えてきました。これら両方の役割をこれから担っていく当雑誌は、学会内外の重要な知的資源となるとともに、学会内の情報交換の要となるメディアになります。学会員の皆様には、これからも和文総説などの積極的な投稿をぜひお願いいたします。また、「原生生物」誌は Newsletter と同様に学会ウェブサイトからの電子配信のみで、印刷体は発行しませんが、年 2 回 (予定) の発行の際にはぜひダウンロードしていただき、今後も「原生生物」誌に注目していただけますようお願い致します。

会費等振り込み先

郵便振替口座

郵便振替口座番号：01300-6-103583

加入者名：日本原生生物学会

銀行振り込み口座

ゆうちょ銀行（金融機関コード：9900）

店番：139 カナ店名：イチサンキュウテン（139店）

当座貯金 口座番号：0103583

受取人カナ氏名：ニホンゲン セイセイフツ カツ カイ

原生生物(GENSEI-SEIBUTSU) 第1巻 第1号

平成30年5月23日 発行

編集兼発行人：沼田 治（会長）

発行所：日本原生生物学会

〒162-8640 新宿区戸山 1-23-1

国立感染症研究所寄生動物部内（会計担当：永宗 喜三郎）

Tel: 03-4582-2693, Fax: 03-5285-1219

事務局：E-mail: gajsp@protistology.jp（庶務担当：細谷 浩史，北出 理）

編集局：〒184-8584 東京都小金井市梶野町 3-7-2

法政大学生命科学部生命機能学科内（編集長：廣野 雅文）

Tel: 042-387-6132, Fax: 042-387-7002

E-mail: hirono@hosei.ac.jp
